

ヒグマと牛と森の共存～環境を守る酪農家に～

北海道帯広農業高等学校 酪農科学科 3年 及川 紀子

「この風景とともに酪農をやっていきたい。」私の描く風景とは広大な大地の中で牛たちがのびのびと草を食べ、木陰でくつろいでいる牧場です。

私の家は道東の別海町で経産牛100頭、育成牛50頭を飼育している酪農家です。町から約20km離れている我が家には見渡す限りに牧草地と森林が広がっています。そして、夏から秋の季節には経産牛を放牧しています。幼少期から自然と牛に囲まれながら家の手伝いをしてきた私は、牛たちが牧草地で自由に過ごしている景色が大好きで、将来は自然があふれる我が家で牛たちが放牧地でのびのびと過ごせる牧場をつくるという目標ができました。ですが、「自然」に目を配ると野生動物の侵入という問題点がありました。

畜産の授業で耳にした体長2mのヒグマOSO18。去年駆除されるまで約50頭の乳牛の命を奪い、経営者を悩ませた”怪物”はNHKでも特集番組が放送されていました。隣の町までOSO18が被害を出していることを知った私は、我が家の乳牛もいつ襲われてもおかしくないという不安と同時にOSO18のような野生動物をださないようにするにはどうしたらいいのかと考えるようになり、この件から野生動物との共存について考えるようになりました。

実際、近くの牧草地にも2年前から親子のヒグマ3頭がクローバーを食べにやってくるようになりました。まだ乳牛が襲われたことはありませんが、夜間放牧をしている近隣農家さんは「襲われないか不安になる」と話していました。父も「薄暗くなったら放牧の準備をしに牧草地に行けない。」と話していました。

被害は、牛が襲われるだけではありません。デントコーン畑にヒグマが侵入して身を食べられた、スタックサイロに貯蔵してあるコーンサイレージが食べられたという話も聞きます。実際、私も近くに住んでいる親子のヒグマはよく見ますが、鹿や狐と同じような自然の一員という印象を受け、人や牛を襲おうとはしてなく、厳しい自然の中で餌を求めて一生懸命生きているのだなと思ったのと同時にOSO18も一生懸命生きていただけなのかもしれないと感じました。

ヒグマが人里に近づいてくる要因には森林があった土地を牧草地として切り開きすぎたことで、生活圏に影響を与えたことが考えられます。また、ヒグマの餌となるミズナラの木やカシワの木が減少したことや、餌にならない針葉樹の植林が行われたことで森林の生態系を変えてしまったからです。北海道は広大な森林に覆われていますが、牧草地をつなげるために木々を伐採処理され見晴らしが良くなっていた場所が身近にあります。住処や餌が不足してしまえば人が住んでいる場所に野生動物が流れてしまうのも無理ありません。

危害を加えてしまったヒグマはハンターに駆除されてしまいます。最近ではヒグマがかわいそうだと批判する人もいますが、身の危険を感じるほどの被害を受けている私達にとってはヒグマの駆除という考えも必要だと感じています。誰も傷つけないためには森林やその周辺環境を整え、

ヒグマと牛、森の3つがきれいな共存関係を築くことが必要ではないでしょうか。

私はヒグマのような野生動物を傷つけず共存していきたいと考えています。そこで、使われていない牧草地を「緑の回廊」として活用することに着目しました。

別海町でも毎年離農者が絶えません。離農した農家からは牧草地を買わないかという話が私の家にも聞こえてきますが、牧草地を買い取ったとしても家族経営で草刈りや施肥など管理作業をするのには限界があります。牧草地の中には、傾斜が多い、川や沢が近い、道が狭くて重機が通れないといった条件の悪いところもあり、そこは耕作放棄地になりつつあります。私はこの耕作放棄地を生き物たちが広く行き来することのできる移動経路「緑の回廊」として確保することを提案します。

「緑の回廊」を確保することにより、ヒグマと牛の接触を避け、森を介して共存するための[ゾーニング]の取り組みが可能になると考えています。

ヒグマが暮らす奥山「コア生息地」の自然を保全しつつ、人間が暮らす市街地「排除地域」との間にある森林や耕作放棄地を「緩衝地帯」として位置づけます。「緩衝地帯」は「緑の回廊」であるためヒグマは「排除地域」に近づくことなく「コア生息地」を行き来することができます。さらに、乳牛の放牧地には電気柵などヒグマを侵入させない誘因物対策や侵入時の駆除を徹底する「防除地域」として管理します。明確な区分けによる[ゾーニング]により双方にとって住みよい環境を確立し、牛とヒグマの接触を極力減らすのが望ましいと考えています。

それには森林の維持管理も欠かせません。日本の森林は4割が人工林です。緩衝地帯での人工林の保全管理と奥山の天然林を自治体と酪農家が連携して管理することで生物多様性の保全にも繋がり[ゾーニング]でヒグマとの共存を目指すことができます。そして、ヒグマが町に降りてこなくてもよい餌が豊富な森林にしていきたいです。

私はこれを地域一体で取り組みたいと考えています。我が家では牧草地内で倒木の撤去や、植林など[ゾーニング]を実践しています。父が毎日トラクターで放牧地を巡回していることでヒグマも牧場から離れている牧草地から近づいていないように感じます。近隣農家の牧草地も的確に[ゾーニング]されれば、「酪農の町」別海町でもヒグマと牛が共存する未来をつくることができると信じています。また、地域の人にもゾーニングを認知してもらえれば、広い範囲を管理することが可能になります。多くの人に認知してもらうために地域で共通の掲示物の設置を行い、認識してもらう活動を行っていききたいと考えています。そして、森林の大切さや野生動物と共存するという意識が広まってほしいです。

そのために、高校卒業後は大学に進学し、酪農家になるための学びを深めるだけでなく、野生動物の生態や森林との関わりについても学び、保護管理や共存の在り方についての理解を深めていきたいと思えます。

姿は見えなくても、お互いの住処で。

それぞれが傷つけることなく、のびのびと暮らせる環境下で。

ヒグマと牛、森を挟んで共存しながら私は酪農をしていきます。